

福岡県現代俳句協会会報

第59号

令和3年5月

佳作賞

人間でいられる時間春の夢

北九州市小倉北区 上野 一子

働いた手が春風をつれてくる

宗像市 三船 熙子

緊急事態宣言直下大根煮る

北九州市小倉南区 中島登美子

蒼穹へ百年日記買いに行く

福岡市東区 松尾久美子

菜の花や沖の巨船の入れ替る

北九州市八幡西区 玉井 葉子

まん中を老婆が歩く節分

北九州市小倉南区 黒川 智子

ひたすらに葱白かりし人の死よ

北九州市戸畑区 鋤塚 聰子

一種の粥のさみどり良寛忌

北九州市小倉南区 芳賀登喜子

追伸の最後こほろぎ鳴いてます

北九州市戸畑区 中村美津江

奨励賞

今回は奨励賞の該当者はいませんでした。

☆多くの会員、会員外の投句をいただき、ありがとうございました。
 ました。新型コロナウィルスのため、いろんな催しが中止
 または延期になる中でしたが、十分な対策を取った上で第
 29回福岡現代俳句大会を開催することが出来ました。
 参加者は少なかったのですが、実りある大会となりました。
 ありがとうございます。

第29回福岡県現代俳句大会入賞作品

大会賞

凍滝のかたちに音の凍ててをり

福岡市東区

大瀬益太郎

毎日新聞社賞

鳥帰る行きも帰りも身ひとつで

福岡市西区

木村 厚子

月刊「俳句界」賞

地球儀を丸ごと洗い春を待つ

北九州市小倉北区

中島直四郎

秀逸賞

麦一寸のびるコロナの棒グラフ

柳川市

鳥巢 徳子

冬に入るようやくゾウになれそうな

北九州市戸畑区

鍋屋 立子

味噌醬油あればこと足る一茶の忌

福岡市東区

水城千恵子

冬木立忘れたはずの下駄の音

北九州市八幡東区

山本 悦子

かなかなやふと忘れ物あるやうな

福津市

なづな

福岡県現代俳句大会報告

令和三年三月十四日(日)に、福岡県現代俳句協会総会および第二十九回俳句大会が、北九州市小倉リーセントホテルで開催されました。コロナ禍の中、東京などの一都三県はまだ緊急事態宣言下にあり、実施するかどうかで議論がありました。参加者が少なくてもいいからやってみようという事になりました。まず、十三時より総会。令和二年度の事業報告から会計報告、会計監査報告、そして、令和三年度の事業計画と予算案と承認されました。続いて、福本会長より規約改正の提案がありました。これは、現代俳句協会の規約改正に伴った措置で、三十才未満の会員の県の会費を免除するというものです。

さらに、役員交代の提案がなされ、承認を受けて、無事総会が終わりました。休憩をはさんで十四時より第二十九回福岡県現代俳句大会です。

片山亀夫副会長の開会の言葉で始まり、福本弘明会長の挨拶を受けた後、毎日新聞福岡本部事業部事業部長の百留康隆様より来賓祝辞を頂きました。

大会では、例年、講師を招いて俳句や文学に関わるテーマで講演会を行ってききましたが、新型コロナウイルスの影響もあり、今回は森さかえ事務局長の基調提案の後、自由討議という、シンポジウム形式で行う事にしました。

シンポジウムのテーマは「俳句の今、俳句のこれから」です。

基調提案の骨子は、俳句にとつての第四の転換点が来ているのではないかと言う事です。第一の転換点が、松尾芭蕉。それまでの俳諧に風雅という事を持ち込み、発句を文芸に高めたところ、大きな俳句の出発点となったということ。

第二の転換点が、正岡子規の俳句革新。

「発句は文学なり、連俳は文学に非ず」と、連歌俳諧から発句を独立させ、俳句として新しい文芸の道筋を付けたということ。

その一手段として「写真(写生)」ということ。それを勧め、高浜虚子がそれを継承拡大させたということ。

発句が俳句と名を変え、一句独立の文芸となった事によつて、俳句の大衆化が進み、特に和歌や連歌の知識が無くても、誰もが俳句を作れるようになったということ。

第三の転換点が、戦後の国語教育と電化などによる生活や社会体制の変化により、言葉や俳句に対する意識が変わってきたということ。

第四の転換点が今。和歌、連歌、俳諧、俳句と続いてきた和の文化や風土の消失と、ITなどの情報化による新しい世代の俳人達が生まれていること。

というような基調提案の後、

一、俳句そのものの変化

二、俳句を発表する仕方の変化

三、結社のこれから
について、福本会長の司会で自由な討論となりました。

結論は出ませんでしたが、実りある討論となりました。

その後、休憩をはさんで大会句の句評と表彰です。

まず、選者の、中川紀城子、片山亀夫、福本弘明、中村和男、上野一子の各氏からの選評がありました。

そして入賞句の披露を川崎美知子理事が行い、表彰に移りました。

参加者は例年の半分以下でしたが、活気ある大会が出来たと思います。



2020年度 福岡県現代俳句協会 決算書

(2020年1月1日～12月31日)

会計 黒川 智子

単位:円

収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	金 額	内 訳	科 目	金 額	内 訳
前期繰越金	1,396,818		印刷費	112,200	会報57号・58号 封筒 投句用紙
第28回 俳句大会費用	167,000	投句料 167,000(334句) 会場整理費 (大会中止) 懇親会費 (懇親会中止)	通信費	48,148	会報発送・葉書・切手
本部助成金	178,160	6月154,700 12月 23,460	第27回 俳句大会費用	110,183	作品集38,500 賞品30,150 送料他31,533 講師謝礼10,000
年会費	122,000	前年度 10,000 本年度 101,000 翌年以降 11,000	事務費	26,020	封筒・宛名シール・コピー他
吟行会・会場費	16,000	若松(16名)	役員会費	63,800	旅費・会場費
雑収入	11	利息	吟行会	29,880	会場費2,960 賞品17,000 送料9,920
小計(当期収入)	483,171		事務局費	40,000	
合計	1,879,989				
収入合計-支出合計=次期繰り越し '1,879,989円-430,231円=1,449,758円			小計	430,231	
監査の結果、決算報告書の通り相違ありません。			次期繰越金	1,449,758	
2021年1月31日			合計	1,879,989	
会計監査 上野 一子					
会計監査 田中 葉月					

令和2年度事業報告

2月2日

役員会

3月15日福岡県現代俳句大会中止

5月

会報57号発行

7月19日

役員会

9月27日

秋の吟行大会(若松)

11月

会報58号発行

令和3年度事業計画

1月31日

役員会

3月14日

福岡県現代俳句大会

5月

会報59号発行

7月18日

役員会

10月3日

秋の吟行大会

11月

北九州市到津の森公園
会報60号発行

令和3年度福岡県現代俳句協会役員

会長

福本 弘明

副会長

片山 亀夫

事務局長

森 さかえ

会計

上野 一子

監事

中西みつよ、田中 葉月

理事

川崎美知子、木村 厚子

名譽会長

黒川 智子、中川 紀城子

顧問

中村 和男、中村 重幸

寺井 谷子

三船 照子、山本 悦子

山本 則男

池田 守一、松岡 耕作

広瀬 邦弘

会員三句競作

今回も、会員の皆様に「当季雑詠三句(三句内)、そのうち一句は花の句で」自由参加ということで募集したら、たくさんの方が投句してくれました。ありがとうございます。

なお、配列は到着順です。

冬野 起助

四月馬鹿どこでもドアで行ったきり

街の灯を仄かに冷ます桜の夜

さよならさよなら さよなら昭和の日

中川 紀城子

悲しみの夜に血を吐く浅蜷貝

呆けてはうつつの落花見ておりぬ

春の山結界として杭を打つ

野 狂

マンボウの肩すかし食うコロナの春

はなちるやひとはひとよのひとひらよ

信号待つ盲導犬の鼻に蝶

小倉 斑女

春の闇抜けだす時のリアリズム

海市迄のびる都市高ハザードランプ

さくらさくらダイヤモンドになる遺骨

安徳由美子

拍手響くその辺りまできつと春
壺中の天桜散りしくばかりにて
墨ふむ山羊の毛の筆鳥雲に

福本 弘明

足並を揃えし落花大八洲
ちるさくら海を潜れば魚となる
園長の長いおはなし花は葉に

中村 和男

花明り子の枕辺にランドセル
おぼろ夜の千年を生き滝さくら
流れきてまた流れゆく花筏

秦 夕美

ことさらにたゆき手指や桜東風
木蓮や死装束のととのはず
夜は雲のながれやまさり遠蛙

原田 俊子

連れだちし人のふと消え桜の夜
散り初めし桜の奥に咲くさくら
両腕を古木に廻し桜守

宮原 安徳

散る桜生き残りの戦友見送りぬ
春の潮ひときわ燈台輝かす
逃げ水を追いつつ祈る見舞い旅

山本 修

片庭の一つ明りや露の臺
春の大地幅跳びの子が舞ひ上る
へりコプターの音の絡まる桜の芽

松岡 耕作

直下して死んだふりなる天道虫
新しき記憶すぐ消え花吹雪
平均寿命越えて三年露の臺

三船 熙子

天寿とは桜ふぶきに似ていたり
平成も昭和もさくらふぶきの中
葉桜になって旅立つ人のいて

村井 良永

葉桜や「三猿」で済む夫婦仲
余生まだ雪割いちげ閉じしまま
わらべらの笑顔咲かせるチューリップ

広瀬 邦弘

花に酔うたつもりで人に酔っており
ミサイルや雀の鉄砲花ざかり
たけのこやまだ増えているコロナ

大下真理子

象の背に金輪際の花しずく
水仙の花殻雨はまだ止まない
ジャズ流れ水面に春の雨しずか

木村 直子

五部咲きと思う桜に殺められ
花の雨シンバルの音かすかにも
この道はさくら吹雪の香なりけり

山浦木公子

コロナ禍の閑散に咲くチューリップ
耐えよこらへよ三密禁令遠蛙
ワクチンの具体化遅れ花は葉に

佐藤 瑞穂

さくらさくら死ぬはむずかし生きており
花冷えやどこに打たれし隠し釘
エレベータ春の吹吸うごとと聞く

天川 悦子

桜花散るを始めて見しは十六才
風光る学生が買う厚き辞書
耳にする「仰げば尊し」我が青春

岩坪 英子

西行の花にも会えず歌も聞かず
あの人ともわれも死ぬ人花のなか
細胞のひとつにもどる春の闇

片山 亀夫

咲けば咲いたと散れば散ったと桜かな
葉桜に友達三人出来ました
花は葉に常なる朝のラッシュかな

池田 康

桜前線染井吉野の速きこと
テレワーク父の机上に君子蘭
とにかく俳句ができる風薫る

引野美沙子

戒壇院しだれ桜の夕月夜
風誘ひ花のさざなみふぶきゆく
彼の世への道しるべとも飛花落花

福原 弘子

村中がいつきにふくらむ花まつり
もういいよコロナの話二度目の夏
戦いを知らぬ児であれ昭和の日

水城千恵子

白魚の跳ねて鹿島の道の駅
ひさびさの魔女の一撃花の昼
春の雲まだ迷っているスニーカー

大瀬益太郎

春昼や草の葉一つだけ揺れて
朝刊を手には春風とすれちがふ
眼帯の追へるやさしさ桜散る

土田 利子

雛あられ緑は鳥に撒いて置く
大試験からだ毀すぞ父の声
バスを待つ桜吹雪にとりまかれ

香山つみれ

相続は子犬二匹と糸瓜苗
病室に人知れずぼうたんの花
縄飛びの縄にからまり花吹雪

矢野二十四

かみふうせん吐息ほどなる重さかな
春の川ややにもふかき生命線
病院と学舎に多し桜かな

山際はるか

亀鳴くや繋がるはずの赤き糸
春障子九品のどこに座ろうか
それなりの形となれり花筏

山本 則男

深吉野の真神の山や花の雲
花守のふところにある山家集
手を上げてどこでも乗れる花筏

上月 大輔

花は葉に中州で交わす砒山言葉
コロナ禍や雲雀も街も傾いて
本棚の本総立ちで原爆忌

鳥巢 徳子

黙黙のウィルス変異麦の花
人類に弾けるコロナ鳳仙花
あの子等に洋に薄める染核水

森 さかえ

とりかへしつかぬくらいにちるさくら
うまし国うまし乙女よ金魚草
ループより抜けだすやうに春を抜け

太田 一明

石垣に残る戦跡花筏
春風に全部任せて歩きをり
忘れてもいいよおぼろに生きている

田中 葉月

あらはなる鎖骨淋しき花曇り
青楓考える人立ちあがる
たんぽぽや仮面でしようかいえ風

川上千壽枝

かげろふや孫の餅踏み見にゆかん
這ひ這ひして筆掴みたる桃の花
餅踏みの餅太糸で切る弥生

本多 進

哀しみはいつも不意打ち花杏
ひとところ日矢さす麓花の雲
繰り返し寄せくる波や鳥雲に

富永 素光

春の闇届くワクチン接種券
花筏流れも知らず潦
段葛桜寂しく街路灯

高尾かつよ

花萬朶少女の夢は獣医さん
ヌーボーと出で春満月の宙ぶらりん
夏蜜相しずかにおす嫁の意地

熊野レニ子

てふてふや父よ母よととびつづけ
桜の下父母と手つなぎし幼き日
大宇宙の星の一つに呼吸せり

堀川かずこ

花は葉に会釈ひとつに満たされる
薔薇の湯や沈めて浮かべ明日も晴

中西みつよ

終着は消費の街よ桜散る
皇居へと精一杯の桜かな
水音にきざす睡りや花の昼

川原 昌子

真昼間の桜に集う女達
風花や見えぬ未来を模索する
生きる力水泳璃花子春掴む

中島 芳昭

抽出しは母の懷豆の花
山裾に裳を広げたる糸桜
産道に咲く仕合わせのクローバー

鳥越 年高

一番に黄砂降りしや友の郷里
友偲ふなんじゃもんじゃの通り行く
人生も桜もさまざま花巡り

薄 美津子

空白を埋めてやさしき花吹雪
詩集色褪せからたちの棘青し
新任の言葉みじかし松の芯

黒川 智子

花過ぎのかすてらシムシム切り分ける
桜鯛少ししゃべり過ぎた夜は

鋤塚 聰子

うつせえわハグ乾杯もなき花見
歪みたる対角線と立夏かな
八十八夜ちよいとそこらに妻を捨て

私の気になる一句

「あなたが今気になる一句について書ける方は書いてください」とお願いしたら、たくさん気になる一句が届きました。

あなたの気になる一句は、何でしょう。

吾子は死にきと誰も知り居り吾子を囲み

渡辺 白泉

渡辺白泉全句集を読んだ時のこの一連の句の違和感。昭和一五年の作であるので、長女出生とそれにつづく死についての俳句が並ぶ。白泉という俳人は、「新興俳句」の中でも、ことに貴重な存在である。今もなお気になる句。

中川 岨城子

亀鳴くや行きしことなき本籍地

小川 輕舟

此の句は、俳人協会賞を二年前に受賞した、俳誌「鷹」の現主宰が、まだ三十五才頃に「本」という席題で作った句です。私が初めて輕舟と句会をした時に、作りたての句を見せられて、この若者ただものじゃないかと直感しました。私の思ったとおり、彼は現代トップの俳人だとかく信じています。

小倉 斑女

みゆき野のよすが淡墨桜かな

照 海

平和と発展を願う、この淡墨桜は、蕾は淡紅色で満開になると白色に、散り際は薄墨色を帯びる桜の中の名木です。岐阜県根尾谷の淡墨桜は、国の天然記念物で一五〇〇年経った今も美しい花を咲かせています。その桜にあやかつて、平和にと福山市御幸町の正戸山に淡墨桜の苗木がこの句碑のそばに植えてあ

ります。昨年よりのコロナウイルスの疫病神
がおさまるよう淡墨桜の句を選んでみました。

村井 良永

煙突が曲がつて見える渋柿ぞ

和田 悟朗

科学者であり、詩人でもある独特な眸での
遠望に魅了された一句です。

木村 直子

デパートの旗ひらひらと火事の雲

横山 白虹

この句は、今から半世紀ほど前に「俳句鑑
賞入門」という本で取り上げられていたもの
です。古本屋でこの本を見つけ、「俳句」へ
入って間もなかった私は、今までの俳句に対
する概念と全然異なる十七文字の世界にびっ
くりしたのです。そして、改めて白虹門下と
して教えを受けていることに感謝したのであ
りました。

天川 悦子

二人居て違うさくらを見て帰る

宮野 由紀

結婚して数十年、六人兄弟の一番上に嫁ぎ、
両親に仕え、男の子三人を育て上げた。長年
連れ添った二人だが、心持ちは同じではいら
れなかったようだ。

三船 熙子

料峭や子安の像のきらきらす

川上千壽枝

私の住む宇美町制施行一〇〇周年記念の一
つとして、昨年、神功皇后に抱かれた応神天
皇の銅像が新しく県道68号線沿いに建立さ
れています。通るたび日の射してきらきらし
ています。心が和みます。

川上千壽枝

一片の落花田水に引かれけり

田村 陽子

桜が咲き農作業が始まる。先ず田へ水を入
れる。山上には雪があるが、大地では菜の花
が咲き、水も音を立てて流れる。

田へ引く水に、ひとひらの花びらが浮かびゆ
く。花びらには、稲作の祝いと豊作の祈りが
こもっている。北国の早春の佳句。

引野美沙子

慰安婦で泣いた桜が未だあつた

上月 大輔

女性の視点でしょうか。未だ戦後の後遺症
とでも申しましょうか、國と國のブツカリ合
いとなっています。今の平和（日本）を大事
にしたい。公共という名目で基本的人権が曲
げられたり、せばめられたりしてはならない
と思います。

上月 大輔

こでまりに嫁ぐ日の娘のまだ素顔

片山 亀夫

今年は桜もあつという間でした。春から夏
に咲く花々もいつきに咲いています。その中
のこでまりが目にとまり、白の美しさにしば
らく足をとめました。この句は、愛情にみち
た御家族のご様子が伺われ、又、男親の嫁が
せる娘への嬉しさ寂しさが良く表現されてい
て、私の大好きな一句です。

福原 弘子

高手小手にしぼり上げたきコロナかな

地球上で暴れまわっているコロナ。好い加
減にして消滅して欲しいものです。

負けるな人類、学者識者のみな様よろしく
お願いします。

三密をさけ、手洗いすること位しか出来
ない不甲斐なさが情けない。

熊野レニ子

香水や土星にうすき氷の輪

津川絵理子

友人が津川絵理子さんを好きで、この句を
教えてもらった。意外な取り合せながら納得
できる感触がありました。

土星の輪が氷の欠片とはなんとロマンティ
ックなことか。それを句に仕立てるとは。俳
人の知識は果てがないと更に実感しました。

中西みつよ

コロナの春に母となりたり子と生れたたり

寺井 谷子

講演された寺井谷子先生の演題は『「今」を詠む』ウィズアフターコロナの時代へであつた。

掲句は昨年角川「俳句」七月号にコロナNOWとして二十一句発表されたその中の一句である。昨年から今年にかけて衰えをしらぬコロナ禍。先生のこの一句は正しく今一番気になる一句である。この時代生まれてきた嬰の健やかな成長を願う。

川原 昌子

一番に黄砂降る島わが対馬

西山 国夫

作品は第四回毎日俳句大賞受賞。作者は私の旧制福高理二からの親友。徴兵逃れのために理科に入ったと云い大学は法科。卒業後東福岡高校で教鞭。一九八二年に穴井太代表の「天籟通信」に入会。一九九八年に句文集「対馬へ」を出版。二〇〇〇年に頭書の快筆を遂げたが、二〇〇五年に七十八才で急逝した。俳句好きで得意。最後まで俳句の添え書きを葉書にしてくれた。あの世で共に句作りをせんと、我も二〇一〇年から俳句を始めた。

鳥越 年高

会員特別作品二十句

「春の駒」

片山 亀夫

春嵐ベリーのごとく来しコロナ

強がりの果ての湿布や牛蛙

父母の笑い上戸と鯉五郎

国旗見ぬ平和なる日や建国日

男は太郎女は花子昭和の日

大の字に空と対峙す春の芝

桜咲く空の余白に雲を置き

母の乳せせりし頃の春の雪

春寒し人減り家減り鼠減り

脱サラの田舎暮らしや春の蟬

啓蛰のものによもによと生えし髭

余生や余生春風なれど波高し

愛しさの杉の根元のすみれ草

今日と言う檜舞台の花吹雪

つちふるや車掻き分け救急車

ロボットの手相吉相春の夜

亀鳴けり五軒家建つ元畑

養え心磨けよ技を春の駒

花散つて一本の樹よ桜かな

青春も老後も同じ春日影

「逃水」

山本 則男

くるぶしのあたりで春を待つてゐる

永き日や魚が化石になる途中

春光をうすく切りたる刃物売り

逃水の中にきのふが浮いてゐる
春愁の切り取り線の見つからず
胸騒ぎしてより蝶になつてゐる
暑き日の目玉の泳ぐ洗面器
空白のページに蟻の死んでをり
かたつむり一般論で生きてゐる
月光を織り込むからす瓜の花
新涼やいつもしづかな葉指
佛壇の奥に掂がる大花野
蟪蛄の恍惚といふ喰はれ方
紅葉谷鬼の匂ひとすれちがふ
烏瓜引けばからまる氏素性
月光を充電したる月夜茸
寒卵銀河系より転がりぬ
討入りの日なりコンビ二灯りをり
白鳥の首の長さで争へる
梵字より湧き出してゐる雪螢

福岡県現代俳句協会会報

令和3年5月(59号)

発行人 福本 弘明

編集人 森 さかえ

発行所 福岡県現代俳句協会事務局

〒839-0223

みやま市高田町岩津299

森さかえ方

TEL.0944-22-5332

FAX.0944-22-2530

印刷所 三池印刷